

新潟市アグリパーク

interview 

体験インストラクター 伊藤 晃雅 さん



動物の魅力を子どもたちに肌で感じてほしい

「幼い頃から動物や虫などの生き物が好きだった。動物に関われる職業に就けてとても嬉しい」と伊藤さん。進学のため福島県から移り住み、魚の生態や飼育方法などを学んだ。縁があって新潟市で就職、南区に住みながらアグリパークで働いている。

職場では最も若手であり、牛・ヤギ・羊の飼育全般を担当している。「体調管理には気を付けないと。呼吸や餌の食べ具合、いつもと様子が変わらないか、こまめに見ている」「毎日接していると愛情、愛着が出てくる。動物が過ごしやすいよう世話をしたい」と語る。

大勢の子どもたちが学校の授業でここを訪れ、伊藤さんはその受け入れも担当している。「動物が『かわいい』をきっかけとして、生態にも興味を持ってほしい。自分自身がそうだったから」

帰る時に名残惜しそうに振り返る子どもや、休日に再訪してくれる子どももいて、日々手応えを感じているそうだ。「家畜の病気について、もっと勉強して知識を増やしたい」と意欲的に語る伊藤さんは、今日も真摯(しんし)に動物たちと向き合っている。

かぼちゃ電車保存会

interview 

会長・車両補修担当 今井 翼 さん



全国的にも貴重な車両を守っていきたい

今井さんは栃木県出身。大学時代は鉄道研究部に所属して自ら部長も務めた。「かぼちゃ電車は古いので、錆びたり、穴が空いたり、木造部分が腐ったり…。維持できずにSLが解体されたとか、よくある話。今のまま、長く残すにはどうしたらいいか、考えながら作業している」と語る。

旧月潟駅には、県内外から多くの鉄道ファンが訪れる。「貴重で価値がある車両。全国を見ても、ローカル色ある車両の保存は少ない」「ここは川が近く風も抜けて、対岸に梨畑が見える、いかにも南区らしい場所。ふわっとのんびりできる空気感が、鉄道好きだけでなく、多くの人を惹き付ける」と今井さん。

「僕の夢はこの車両に『動き』を与えること。車両が現役だった頃の雰囲気をつか作りたい。ラッパが鳴って、ライトが光って、放送が流れて…。月潟まつりや大道芸フェスティバルで動かしてみたい。できることはまだまだある」。今後の活動がとても楽しみである。

しろね大風タウンガイド

interview 

まちあるきガイド 倉科 玲央奈 さん



車窓からは決して見えない風景がある

「もともとイベント、祭りが大好き。今までは『参加する側』だったけど『参加してもら側』をやりたかった。地域の魅力を知って欲しい」とガイドに応募した。

会の中では一番の若手。最初は「緊張して何を話していいかわからなくなった」と振り返る。「知り合い2、3人で参加する人もいれば、1人で来る人も。年齢層も違う。何を話したら興味持ってもらえるんだろうといつも考える。マニュアルはあるけど、参加者に合わせて臨機応変に」と話す。今では話が盛り上がりガイド終了後も、お客さんとの井戸端会議が続くこともあるという。

免許はあるが車はあまり運転しない。歩いたり自転車に乗ったりして、土地を肌で感じることも多い。「たくさんさんの空き店舗ももったいない。空いている建物でイベントをやってみたりして、白根をもっと活気ある街にしたい」と倉科さん。「仕事ではできない、ボランティアだからこそ、できることがある」と、今日も訪れる人に街の魅力を伝える。

マスヤ製菓

interview 

菓子店店主 関根 建 さん



菓子に込める地元への思い

父と母、親子三人で菓子店を営む関根さん。「梨ようかん」は国の天然記念物「月潟の類産ナシ」の実を使った一品。先代が約50年前、この原木を見て感銘を受けて考案したという。

「類産ナシは月潟の象徴で、とても大切な木。このお菓子は、こんなに素晴らしいものがあることを知ってほしいという父の思いが原点。味だけでなく、その思いも受け継いでいきたい」「月潟のお土産といえばこれ、と言ってくれる人も。梨の実を提供してくれる原木所有者のご厚意や、地元のお客さんのおかげで定番商品となった」と話す。

他にも「かぼでん」という名前のサブレ、「角兵衛せんべい」など、地元になんだ商品が並ぶ。「子どもの頃は、市が立つ日の人通りがすごかった。今あるものをうまく活かすことで、また月潟に賑わいや活気が戻ってくるといい。私たちはお菓子を通じてこの街を盛り上げていきたい」と、地元根差したお菓子作りを続けている。